

ワーク中心

プログラム番号 2801A

始めよう！アクティブラーニング型授業 －話し合いの技法編－

■講師

葛城 浩一（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 准教授）
平成 12 年 3 月広島大学教育学部教育学科卒、平成 22 年広島大学にて博士（教育学）の学位取得。平成 20 年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授、平成 21 年度より香川大学大学院教育学研究科を兼任。

■プログラム概要

近年、各大学にはアクティブラーニング型授業の充実が強く求められていますが、みなさんはアクティブラーニングのことをどの程度ご存知でしょうか。アクティブラーニングに関する誤った理解や情報の不足は、みなさんをアクティブラーニング型授業（の充実）から遠ざけることとなります。

そこで本プログラムでは、アクティブラーニングに関する基礎的な知識を、アクティブラーニングのひとつの手法である「協同学習」を体験しながら学んでいきたいと思います。「協同学習」とは、仲間と共有した学習目標を達成するためにペアもしくは小グループと一緒に学ぶ学習活動のことです。協同学習は、少人数講義でしか行えないように思われるかもしれませんが、各技法のポイントを押さえれば、大人数講義でも効果的に行うことができます。本プログラムを通して、みなさんのアクティブラーニング型授業の充実にお役に立てれば幸いです。

■主な受講対象

アクティブラーニング型授業（特に協同学習の技法を取り入れた授業）を行いたいと思っている教員。本プログラムでは基礎的な技法を扱いますので、特に授業経験の少ない教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングとはどのようなものか、また、協同学習とはどのようなものかを説明することができる。
2. 協同学習の技法（話し合いの技法）を3つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に協同学習の技法（話し合いの技法）を取り入れることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2801B

高等教育機関のSDGsへの貢献を 見える化する



NEW!

■講師

小林 修（愛媛大学 国際連携推進機構アジア・アフリカ交流センター長／准教授）

平成9年3月北海道大学大学院農学研究科博士課程林産学専攻・修了（博士（農学））、平成9年9月愛媛大学農学部附属演習林・助手、平成21年7月愛媛大学国際連携推進機構アジア・アフリカ交流センター・准教授。

演習林にて学生教育と社会貢献（障害者対象）を兼ねた森林環境教育事業をモデルに、平成18年文部科学省現代的教育ニーズ採択事業で共通教育に環境ESD指導者養成カリキュラムを開講、令和元年にカリキュラムを改定し「SDGs—グローバル未来創成入門」を新規に開講。平成24年度文部科学省採択「大学の世界展開力強化事業」で共通教育にSUIJIサーバントリーダー養成カリキュラムを開講し、SDGs関連カリキュラムを国際的に展開。

■プログラム概要

本プログラムでは、高等教育機関で活躍する教職員の教育・研究、支援業務とガバナンス、地域貢献活動などが、持続可能な開発目標「SDGs（Sustainable Development Goals）」の達成に、どのように貢献しているかについて、ワークショップを通じて「見える化」することを目標とします。

SDGsは、自然環境、社会文化、経済がともに調和を取りながら、持続的に発展する社会の構築を目指して、2030年までに世界が解決すべき17のゴール（課題）と、そのゴールを達成するために必要な169のターゲットから成り立っています。SDGsを達成する過程では、世界の「誰一人取り残さない」ことをスローガンに、産官学民が協働して取り組むことが求められています。高等教育機関に所属する皆さんが、SDGsにどのように貢献しているかを「見える化」することによって、グローバルな視野で自らの仕事が持続可能な社会づくりに貢献していることを再発見します！

当日までに、下記のリンクにて「大学でSDGsに取り組む」日本語翻訳版をご一読いただくことをお勧めします。<https://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/sdgs-guide.html>

■準備物や事前課題

当日は、皆様の教育研究活動や業務等について、グループワークの際に他の参加者にわかりやすくご紹介いただきます。その際に提示できるスライド資料などをみやすい大きさ（スライド一枚あたりA4一枚に印刷して、合計4枚程度）印刷してご持参ください。

■主な受講対象

自らの教育研究活動や大学運営業務が、世界共通の課題にどのように貢献できているかを確かめたい、教員、職員の皆様の参加を歓迎します。

今回のプログラムで培った知識などを、職場に戻って普及することを目指している方にもお勧めします。

■本プログラムの到達目標

1. 自分の仕事や組織の活動が貢献するSDGsを4つ以上挙げるができる。
2. ご自身の活動がSDGsに貢献することで、今後作られていく持続可能な社会のイメージを思い描き、説明できるようになる。
3. ご自身の活動とSDGsとの関連を発見することによって、活動のさらなる発展・改善の方向を説明できるようになる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

大学職員のためのコーチング

■講師

小林 忠資（岡山理科大学 獣医学部 講師）

名古屋大学教育学部卒業。同大学院教育発達科学研究科教育科学専攻満期退学。名古屋大学高等教育研究センター研究員、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特定研究員、特任助教を経て、2018年4月より現職。大学におけるFD・SD、現職看護師向けの教育研修など、専門職を対象とした人材育成に関わっている。

■プログラム概要

職場には、後輩や学生を指導するさまざまな場面があります。そのような場面では、後輩や学生に答えを提示することもできます。しかし、それでは相手の成長を期待することはできません。後輩や学生の成長を促す指導をするうえで役に立つのが、コーチングです。

コーチングは、人材開発の一つの技法で、相手の目標達成を促すためのものです。相手に答えを提示するのではなく、コミュニケーションをとおして相手のもつ答えを引き出す点に特徴があります。

本プログラムでは、コーチングの理論やさまざまなスキルについて学習します。職場での具体的な事例をもとに、コーチングのさまざまなスキルを理解し、職場で状況に応じてコーチングのスキルを活用できるようになることを目指します。参加者が事前課題として提出したいいくつかの事例（後輩指導や学生指導で困った場面）についてグループで検討し、コーチングについての理解を深めます。

■準備物や事前課題

事前提出課題あり

これまでの経験を振り返り、後輩や学生を指導するうえで困った場面を事前課題シートに具体的に書いてください（提出いただいたいくつかの具体例を講師が加筆・修正し、本講義においてグループで事例検討を行う予定です）。

■主な受講対象

- ・後輩や学生を指導する職員
- ・コーチングに関心のある職員

■本プログラムの到達目標

1. コーチングの特徴を説明することができる。
2. コーチングのスキルを5つ以上挙げることができる。
3. 状況に応じて、コーチングのスキルを活用することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

教学IRが機能する組織におけるデータ管理

■講師

竹中 喜一（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

平成16年3月大阪大学人間科学部卒業。民間企業でのSE等の業務、関西大学での事務職員としてのFD、SD、教学IR等の業務、愛媛大学特任助教を経て、平成31年4月より現職。関西大学在籍中に業務と並行して名古屋大学大学院で高等教育論、大阪大学大学院で教育工学を専攻し、大学職員論をテーマに研究。博士（人間科学）。

山咲 博昭（広島市立大学 企画室 特任助教）

平成22年3月関西大学文学部卒業。平成22年4月学校法人関西大学へ入職、教務事務、大学基準協会出向、自己点検・評価（認証評価対応含む）等に事務職員として従事し、平成31年4月から現職。IR担当教員として、データの収集・管理・分析等を担う。関西大学在籍中に業務と並行して桜美林大学大学院で高等教育論を専攻し、大学職員論をテーマに研究。修士（大学アドミニストレーション）。

■プログラム概要

教学IRを進めるにあたって、学生や教育プログラムに関する教学IRデータの適切な収集・活用・管理が求められます。教学IRデータを適切に取り扱うためのルールがあれば、個人情報漏洩などのリスク回避はもちろん、教学IR担当者の倫理観醸成や教学IRデータの取扱に関する不安軽減にもつなげられるでしょう。

そこで本研修では、教学IRデータを適切に取り扱うための①基本的な管理方法や留意点、②個人でできること、③組織的に行うこと、を中心に扱います。その中で、教学IRデータの管理に関するルールづくりの事例紹介も行います。

所属する組織において、データの取扱が適切かを確認し、取扱ルールを定めるためのヒントを得ることができる機会としたいと思います。

なお、本研修の対象は、主に教学IRデータの分析や管理を担当する教職員を想定しています。

■準備物や事前課題

所属部署あるいは大学におけるデータの取扱に関連する文書（規程、ガイドライン）の内容についてお尋ねしますので、予め確認をお願いします。

■主な受講対象

教学IRデータの分析や管理に関わる教職員

■本プログラムの到達目標

1. データを適切に取り扱うための基本的なルールや留意点を説明できる。
2. データを適切に取り扱うために求められる姿勢と行動を説明できる。
3. 所属大学でのデータの取扱のすぐれた点と課題を列挙することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

教職員のための大人数講義のコツ

■講師

小林 直人（愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構教育企画室長、
医学部附属総合医学教育センター長・教授）

昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒、平成 7 年博士（医学）の学位取得。平成 10 年度より愛媛大学医学部助教授、平成 17 年度より同教授。現在、愛媛大学学長特別補佐、教育・学生支援機構副機構長、教育企画室長を兼任。教育担当理事（教育・学生支援機構長）のもと、大学全体のFDをマイクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。

■プログラム概要

「よい」講義とはここでは、聞き手の学生にとって分かりやすく、知的な緊張感があり、さらに学生が参加する（した気にさせる）講義、ということにしておきます。大人数での講義にはデメリットも多いのが事実ですが、現在の高等教育の実情を考えればこのような授業形態を避けることは困難です。大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法、学生を積極的に講義に参加させる方法や授業効果を高める方法など、様々な授業スキルを、実例や実習を通して習得することができます。特に、昨今の高等教育に強く求められている参加体験型授業/アクティブラーニング型授業の一例として、受講者に実際にグループワークを体験していただきます。

講義を受け持つようになって間もない教員の方はもちろん、自分の講義を振り返りたいと思われる方、また職員の方々も是非受講してください。ご自分の経験（失敗談も歓迎です！）や他で見聞きした実践例を共有しましょう。きっと、明日の授業に役立つヒントが見つかります。

■主な受講対象

まだ講義経験がないか数年未満の講義経験しかない教員の方を歓迎します。また、学務系の職員の方にとっては、大学の講義に今求められていることについて考えるよい機会になると思います。

■本プログラムの到達目標

1. 学生にとってよい授業とはどのようなものかを具体的に説明できる。
2. 自分の経験に基づいて、大人数講義のメリットとデメリットを列挙できる。
3. 大講義室ならではの様々な授業スキルを、実際の体験を通して習得し自分の授業に生かすことができる。
4. 「学生中心の大学」の実現のためによい授業ができるようになる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

職員のための「講師養成講座」



NEW!

■講師

吉田 一恵（愛媛大学 教育学生支援部 愛媛大学SD統括コーディネーター 兼
能力開発室長）

愛媛大学法文学部法学科卒業。文部事務官として愛媛大学各部局、国際交流センターにおいて主に総務、国際交流を担当。法人化を挟み、広報室長、人事課長、教育学生支援部長を経て平成29年4月から現職。広報室・人事課での約6年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、主に人材育成・評価、労務、男女共同参画、人権侵害事案等々に対応、全事務系職員へのスタッフポートフォリオの導入も実施、教育学生支援部では、入学から就職までの学生支援活動、危機管理事案に対応するとともに、現在まで一貫して教職員能力開発拠点SDC（SDコーディネーター）／SPOD-SDCとして職員の能力開発に取り組んでいる。

久保 秀二（愛媛大学 医学部人事労務課 課長）

平成7年愛媛大学事務職員に採用、高知大学、弓削商専高専の勤務を経験後、愛媛大学に復帰。主に人事、人材育成、労務、給与の業務に従事しながら研修講師も幅広く担当。平成29年4月から現職。（教職員能力開発拠点SDC／SPOD-SDC）

大塚 陽介（愛媛大学 農学部事務課総務チーム チームリーダー）

平成14年10月愛媛大学採用。学務系・総務系・人事系・外部資金（寄附基金）獲得の職歴を経て現職。大学等の経営を担うために必要な技能（実践力）・知識（理論）・態度を身につけるために四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）が実施した「次世代リーダー養成ゼミナール」第3期（2012年度～2013年度実施）修了生。SPOD-SDCとして、これまでSPODで実施された数々のSDで講師を務めている。平成31年1月から現職。

宮原 秀明（大阪学院大学 庶務課 兼 社会連携室 課長）

1997年3月龍谷大学法学部政治学科卒、2013年3月熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻を修了し修士（教授システム学）の学位取得。大学職員在職中に、eラーニングで学べる上記大学院で学び、人事担当職を務めた6年間には新入職員研修やフォロアーアップ研修などを企画・実施することを業務として担当。

小林 諒太郎（大阪経済大学 総務部人事課 職員）

1984年長野県生まれ。大学卒業後、民間企業でマーケティング・編集者として勤務。クライアントの販促支援・広告系企画制作に携わる。2012年大阪経済大学入職。入試部にて入試広報業務に携わったのち、2018年人事課に異動。「人材育成ビジョン」策定、組織横断的業務として大学長期ビジョン・中期計画策定に関するWGに参画。

■プログラム概要

高等教育機関の意欲のある職員に対して、研修講師として必要な「心構え」、「知識」、「技法」を、講義及びマイクロティーチングにより習得させ、将来のSD講師として育成することを目的とする。

■準備物や事前課題

- ・事前課題あり（人数確定次第、連絡します。）
- ・準備物：パソコン（当日、事前課題のプレゼン資料のブラッシュアップに使います。）
*持参が難しい場合、数に限りはありますが貸出もできます。（事前にご相談ください。）

■主な受講対象

- ・上手に教えられるようになりたい職員
- ・学内での研修で講師を務める可能性のある職員
- ・将来SD講師になる意欲のある職員

■本プログラムの到達目標

1. 講師に求められる役割と姿勢を説明することができる。
2. 講師として学習者の学びを促進する方法を説明することができる。
3. 講師として研修プログラムをデザインすることができる。
4. 研修技法を述べることができる。
5. 研修講師を務める際に必要な知識・技法を習得することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）10：00～17：30

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2802A

始めよう！アクティブラーニング型授業 －教え合いの技法編－

■講師

佐藤 慶太（香川大学 大学教育基盤センター 准教授）

平成 11 年 3 月高知大学人文学部人文学科卒、平成 21 年京都大学にて博士（文学）の学位取得。平成 25 年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授。

■プログラム概要

現在、大学では「アクティブラーニング」が一つのキーワードとなっており、このキーワードのもとで、授業をどう変えていくべきかが、大学、そして個々の教員の課題となっています。とはいえ、まず取り扱う内容に合わせて適切なワークを課すことも考えておかなければなりません。なるべくいろいろなワークの選択肢を持っておくと、授業デザインがスムーズにすすめられます。

この講座では、アクティブラーニング型学習のなかでも特に、学生同士の教え合いが成立するグループワークの技法を紹介します。まず受講生の皆さんには「ジグソー学習」の技法を中心に、3つの教え合いの技法について、体験を通じて学びを深めていただきます。その後、「ラーニングセル（学生がペアになり、テスト作成、回答するワーク）」、「フィッシュボウル（代表者にディスカッションをしてもらい、それ以外の学生がそれを見ることで学びを深めるワーク）」について、講師の実践事例を交えて紹介をします。

本講座が、受講生のみなさんのアクティブラーニング型学習の選択肢をひろげる一助となれば幸いです。

■主な受講対象

アクティブラーニング型授業の技法を、担当の授業で導入しようと考えている教員の方。また、アクティブラーニング型授業が具体的にどのようなものなのか、知りたい方。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングとはどのようなものか、また、協同学習とはどのようなものか、説明することができる。
2. 教え合いの技法を3つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に教え合いの技法を取り入れることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

若手職員向け超入門！ 研究者と学術情報流通

NEW!

■講師

井上 昌彦（関西学院大学 図書館 課長補佐）

図書館情報学卒業、大阪市立大学大学院創造都市研究科前期課程修了（都市情報学）。
就任以来、大学図書館・短期大学図書館・研究推進社会連携機構に配属される。これまでの
担当業務から、学術情報流通の変容と今後のあり方、それを通じての研究者支援について、
強い関心を持つ。

■プログラム概要

「科研費」、「査読」、「インパクトファクター」、「電子ジャーナル」、「研究評価」、「オープンアクセス／オープンサイエンス」…。若手職員の皆さんも、これらのいくつかは耳にしたことがあるでしょう。では、これらについて、皆さんはどれくらいご存じでしょうか？

皆さんがこれから研究者を支援していくためにはまず、研究者を取り巻く世界について
知ることが大切です。

研究者を取り巻く世界は、ドラスティックに変化しています。研究環境とともに、研究者
の知的生産物である学術情報（論文等）も、そのあり方を劇的に変えています。

このプログラムでは以下の3つのポイントを通じ、研究者を取り巻く世界と今後の支援
のあり方について考えます。

<3つのポイント>

- ・研究環境の変化
- ・学術情報流通の変化
- ・大学（とりわけ図書館）の果たすべき役割

■主な受講対象

大学職員。特に本プログラム内容について、業務上接する機会の少ない一般職・若手を歓迎
します（大学図書館員も歓迎）。

基礎からゆっくりと話しますので、教員や研究支援に携わる職員など、本テーマに関する知
見を有する方や当事者は、受講する必要がないと考えています。

■本プログラムの到達目標

1. 研究環境と学術情報流通の変化を通して、研究者を取り巻く世界を理解することができる。
2. 大学（図書館）の果たすべき役割や方向性を、イメージできる。
3. 自分なりの問題意識や関心を持ち、長期的に研究者に寄り添うことができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2802C

人材育成のための人事評価 ー評価からパフォーマンス・マネジメントへー

■講師

阿部 光伸（愛媛大学 教育・学生支援機構 講師）

東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での15年の教員生活を経て、平成15年度から東北文化学園大学に勤務し学生課長、教務部長、学園事務局部長として人事評価を経験。現在、職場内人材育成をテーマにSDを担当。平成25年10月から現職。

■プログラム概要

高等教育機関においても人事評価の必要性／重要性が謳われて久しいですが、“人事評価に時間を掛けることが出来ない／公平・納得性のある評価が出来ているか不安／形骸化している”といった悩みを多く聞きます。

そこで、今回の人事評価研修では、人事評価が人材育成の一手法であることを紹介するとともに、能力や行動の評価に基づく本人へのフィードバックを行い、組織の活性化と個人の成長を促すために有効な手段（パフォーマンス・マネージメント）となりうることを紹介します。

なお、受講者の皆様にはワークを通じて部下の育成・指導・評価のポイントを理解していただき、能力開発を促す手法を身に付けていただきます。

■主な受講対象

課長相当職の職員を主対象としますが、人材の育成・指導・評価について関心がある方の受講も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. メンバーの育成・指導・評価のポイントを説明できる。
2. メンバーの特性に応じた目標達成プロセスへの関わり方、支援の仕方を説明することができる。
3. 人材育成につながる評価を行うことができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

IRデータ分析演習



NEW!

■講師

高畑 貴志（高知大学 大学教育創造センター 特任講師）

平成10年東京大学にて博士（学術）の学位取得。平成15年より、高知学園短期大学で情報教育に携わり、看護師養成課程の統計処理の授業などを担当。平成27年度から湊川短期大学で情報教育・初年次教育に携わり、平成29年にIR委員会委員。平成30年からは、高知大学でeラーニングや教学IR分析を中心に担当。

所属学会：日本オペレーションズ・リサーチ学会、日本医療情報学会、日本教育工学会。

■プログラム概要

教学IRのプロセスのうち、入手したデータの分析前準備、分析、情報提供の範囲について、模擬データを題材に、Microsoft Excelで初歩的なデータ処理と分析を行うための技能を身に付ける演習です。講師の説明や資料を参考に、受講者がデータ処理や分析のタスクを順に進めていく形式が中心です。

前提となるExcelの知識を確認できる事前課題を用意します。また、反転学習形式で取り組んでいただけるよう、内容を事前に提示します。グループ内でのピア・ティーチングを期待します。以下のような内容を予定しています。

[分析前準備]：データのチェックと修正、データの結合

[分析]：基礎的な統計量の算出、棒グラフ・円グラフ・ヒストグラムの作成
クロス集計、散布図と相関係数による分析

[情報提供]：効率的な属性（学部・学年等）別のグラフ作成

(キーワード)

絶対参照／相対参照、COUNTIF関数、VLOOKUP関数、フィルタ機能、ピボットテーブル、グラフテンプレート、リンク貼り付け

■準備物や事前課題

- ・Excel(2010以降)とWordが利用でき、インターネットまたは講師が用意したUSBメモリを使えるWindowsパソコンを持参してください。プログラムでの説明はExcel2016を用います。Excel2013の場合の対処方法は可能な限り説明資料に掲載します。
- ・前提となるExcelの知識（基本的な表の扱い、初歩的な数式・関数の利用、簡単なグラフ作成、並べ替え）の事前課題を用意しますので、受講までに確認してください。プログラムの内容も提示しますので、事前学習を推奨します。

■主な受講対象

IRの実務担当者や教学データの処理を担当する方を主な対象とするプログラムです。これらの業務を担当されて間もない方や、担当予定の可能性のある方を想定した内容になっています。

■本プログラムの到達目標

1. 初歩的なデータ処理と分析を、資料を参考にして、Excelで行うことができる。
2. キーワードに挙げたExcelの仕組みを、資料を参考にして、IRの実務で活用できる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2802E

授業内グループワークへの 参加意欲を高めるためのアイデア

■講師

村田 晋也（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

九州大学大学院経済学府博士後期課程満期取得退学。九州国際大学経済学部経営学科専任助教を経て、平成26年9月より現職。現本務校においてFD・SD活動に加え、学生の能力開発（「愛媛大学リーダーズ・スクール（ELS）」）、及び文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム（UNGL）」の運営）に携わる。専門は組織論、人的資源管理論、リーダーシップ論。

■プログラム概要

「社会人基礎力」「就職基礎能力」「学士力」などに示される内容からも明らかなように、現在、大学在学中に学生が体得するよう実社会から期待される能力は多様化しています。これらを背景に、大学では教員が一方向的に講義を行い知識を伝達していく教授法のみならず、学生自身が主体的・能動的に授業に参加するアクティブラーニングの導入が推進されていることは周知の通りです。

現在、多くの先生方がご自身の担当授業に、学生同士のディスカッションや多様な形式のグループワークなどを導入されていることと思いますが、この研修では、これらの活動に対する学生の参加意欲をより向上させるための仕掛けや工夫について、様々なアイデアを取り上げてまいります。なかでも、授業の導入部分に焦点を当て、学生の参加意欲を刺激し、協同的な学習の意義や有効性に気付いてもらうためにウォーミングアップとして導入できるアクティビティについて体験的に学んでいただけるよう計画しています。研修の中では、先生方のご経験をシェアしていただく機会も設けたいと思います。多くの方のご参加をお待ちしております。

■主な受講対象

授業内でグループワークやディスカッションなどを導入（ないしは導入を検討）している教員の方を歓迎致します。併せて、各種セミナーの講師経験があったり、今後講師を務める予定をお持ちの職員の方々にもご参加いただくことができます。

■本プログラムの到達目標

1. 授業内でのグループワークへの参加意欲を高めるアイデアの幾つかについて説明できる。
2. ウォーミングアップのアクティビティについて、その意義と有効性を説明できる。
3. 学生の参加意欲を刺激するアイデアを、実際の体験を通して習得し、自分の授業（ないしセミナー等）への導入を検討できる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2803A

始めよう！アクティブラーニング型授業 －文章作成の技法編－

■講師

西本 佳代（香川大学 大学教育基盤センター 准教授）

広島大学教育学部第五類教育学系コース卒業、同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了、同研究科教育人間科学専攻博士課程後期退学。2008年より香川大学教育・学生支援機構の特命助教として勤務。山口福祉文化大学（現・至誠館大学）ライフデザイン学部講師を経て、2015年より香川大学大学教育基盤センターに勤務。専門は教育社会学。

■プログラム概要

2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」以降、アクティブラーニングはいずれの大学においても取り組まなければならない課題として認識されるようになりました。

このプログラムでは、アクティブラーニングに関する基礎的な知識と共に、その技法の一部をご紹介します。アクティブラーニングと一口に言っても、その内容は広範多岐にわたります。そこで、本プログラムでは、文章作成の技法に焦点を絞り、その技法を体験しながら、ご自身の授業でどのように取り入れることができるか検討していただきます。なお、同日（8月28日）には、同じシリーズの、①話し合いの技法、②教え合いの技法、について紹介する講座も開講されています。アクティブラーニングの技法をさらに学びたい方は、シリーズでの受講をおすすめします。

（本プログラムは、SPODフォーラム2018開講「学生参加型授業の技法」と内容が重複しています。）

■主な受講対象

文章作成に関するアクティブラーニングを授業に取り入れようと思っている教員。本プログラムでは基礎的な技法を扱いますので、特に授業経験の少ない教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングとはどのようなものか、説明することができる。
2. 文章作成の技法を3つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に文章作成の技法を導入することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）15：30～17：30

場所：愛媛大学城北キャンパス

地域連携マネジメント・プロジェクト企画論

NEW!

■講師

坂本 世津夫（愛媛大学 社会連携推進機構 教授、地域連携コーディネーター）
2002年4月から2005年3月まで、愛媛大学にて「地域情報学」（伊予銀行寄附部門）を担当。2005年4月から2011年3月まで、高知大学国際・地域連携センター教授（生涯学習部門長）。2014年10月から愛媛大学社会連携推進機構教授（地域連携コーディネーター）。日本の情報化を、地域という視点で見直し、地域における「知的能力」と「コミュニケーション能力」を高めることにより、新たな産業集積や地域の活性化（地域の自立）が実現できないか、研究・実践している（ICT利活用促進）。総務省委嘱地域情報化アドバイザー、一般社団法人日本テレワーク協会アドバイザー、地域活性化伝道師（内閣官房）、マイルドさ国党（党首）等。

■プログラム概要

急速な人口減少、超高齢化社会、従来型産業の衰退と、現在の日本は（日本の地域社会は）大きな転換点にさしかかっている。それを打開させる為に、「地方創生」が叫ばれているが（国では、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生できるよう、まち・ひと・しごと創生本部を設置している。そして大学には、自治体との連携を強化して打開策に取り組み、地域課題に対応できるように大学改革が求められている）、具体的にどう対応すれば良いのか、国も自治体も大学も打開策を見いだせていない状況にある。

今回の講義では、地方創生の意味を理解して、地域が本来持っている資源を如何に活用して地方創生を図るか、教職員は如何にアクションすれば良いのかについて講義を行う。地方創生、地域資源を活用した地域の活性化、地域連携マネジメント・プロジェクト企画のヒントになればと考えている。

■主な受講対象

教職員

地方創生、地域活性化の為に、地方国立大学がリージョナルセンターとしての機能をさらに強化しなければならない。大学を「地（知）の拠点」とするために活動している多くの教職員に参加していただきたい。

■本プログラムの到達目標

1. 地方創生の意味が理解できる。
2. 地域資源の活用方法を提案できる（地域イノベーションの提案）。
3. 地方創生における大学の意義・方向性を理解できる（COCの意義）。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）15：30～17：30

場所：愛媛大学城北キャンパス

若手職員のためのリーダーシップ入門

NEW!

■講師

大本 盛嗣（愛媛大学 総務部経営企画課経営企画チーム チームリーダー）

平成13年愛媛大学事務職員に採用。医事、総務、学務、人事、学長秘書を経験。平成30年度から経営企画課で学部・大学院の改組を担当。平成26年度に次世代リーダー養成ゼミナールを修了、平成29年度にSPOD-SDC認定。

■プログラム概要

「リーダーシップ」という言葉を聞いたとき、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべますか？リーダーシップと言えば、管理職など、いわゆるリーダーが発揮するもの、というイメージを持つ人が多いのではないのでしょうか。特に若手職員の方は、自分はリーダーではないので、リーダーシップは自分に関係ないものと思ってはいないのでしょうか。

実は、リーダーシップはリーダーだけのものではありません。どのようなポジションの人であってもリーダーシップを発揮することができます。また、リーダーシップには様々なスタイルがありますが、私たち一人ひとりのリーダーシップが、職場の組織力のために必要であることは間違いありません。

このプログラムでは、若手職員に発揮してほしいリーダーシップについて紹介します。どのようにリーダーシップを発揮したらいいのかを一緒に考えていきましょう。

■主な受講対象

若手職員（主に採用1年～5年程度）

■本プログラムの到達目標

1. リーダーシップについて述べることができる。
2. 自己の仕事レベルでリーダーシップを発揮することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）15：30～17：30

場所：愛媛大学城北キャンパス

あなたもできる ケースメソッド型授業・研修

■講師

上畠 洋佑（新潟大学 教育・学生支援機構 教育・学生支援企画室 准教授）
平成 16 年 3 月広島大学文学部人文学科卒、平成 25 年 3 月東京大学大学院教育学研究科
大学経営・政策コース修士課程修了。平成 27 年 4 月より金沢大学国際基幹教育院高等教育開
発支援部門特任助教、平成 30 年 4 月から愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特任助教、
平成 31 年 4 月から現職。学位・副専攻プログラム等カリキュラムに関する研究と実践を担
当。

■プログラム概要

ケースメソッドとは、アメリカのハーバードロースクールで生まれ、ハーバードビジネス
スクールで体系化された教授法です。この方法で展開される授業では、唯一の正解があるわ
けではない不確定要素の多い状況の中で、ひとつだけではなく意思決定する疑似体験学習が
可能となります。また、一つの状況に対して、多くの異なった意見・視点が提示されること
で自分の考え方のクセを認識し、自らを相対化するトレーニングを行うことができます。

本プログラムでは、このケースメソッドを知識として理解するのではなく、参加者がケー
スメソッド型ワークショップを実際に体験することを通して、教職員向け研修を企画・運営
したり、PBL 科目の事前学習やキャリア教育科目等で活用したりするためのヒントやエ
ッセンスを学習する機会として提供します。

■準備物や事前課題

あり（ケースを 1～2 週間前に事前配布して読んできていただきます）

■主な受講対象

- ・SDに関する企画運営業務を担う教職員
- ・学内外の自主的なSDを企画運営する教職員
- ・ケースメソッドを授業方法に取り入れたい教員

■本プログラムの到達目標

1. ケースメソッド型ワークショップの体験学習を通して、ケースメソッドがどのようなも
のか説明することができる。
2. 本プログラムで学習したことを用いて、自らが担当・企画しているSDプログラムまた
は授業科目をより良いものにするためのヒントにすることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）15：30～17：30

場所：愛媛大学城北キャンパス

大学設置認可申請入門



NEW!

■講師

長山 琢磨（学校法人東北学院 法人事務局庶務部庶務課 係長）

リサーチマップを御参照ください。（<https://researchmap.jp/t-nagayama/>）

これまで設置認可申請業務として、大学院新設、学部改組、博士後期課程設置及び寄附行為変更認可申請などを一体的に経験してきました。

■プログラム概要

大学設置認可制度は、我が国の質保証システムに位置付けられており、大学設置認可申請に事務職員として関わることで、組織改革を通じて教育改革にも繋げることができる業務です。しかしながら、実務を経験しないとイメージがしにくい点もあり、担当者になった場合、どのような点に留意して業務を進めればよいのかを把握しておくことが重要です。

そのためには大学設置認可制度、自組織の文脈・教育実践などを統合し、新たな価値の創造に繋げる設置事務担当職員の力量が重要です。本講義では、大学設置認可制度の概要を概観した後、具体的な事務手続き上で留意した方がよい点、設置構想の構造化を行うにあたっての考え方など、講師がこれまでの業務経験で気づいた点を織り交ぜながら講義を実施します。また、途中でケースを用いたワークショップを実施することで、より具体的なイメージが掴めるようにしたいと思います。

■準備物や事前課題

設置認可制度への理解を深めるために、次の論文を御一読ください。

・塩野宏「日本の行政過程の特色-大学設置認可過程」日本學士院紀要、68巻、2号、2014

https://www.jstage.jst.go.jp/article/tja/68/2/68_KJ00008946999/_article/-char/ja/

・朴澤泰男「現代日本における大学設置認可行政の構造分析のための基礎的考察」

東京大学大学院教育学研究科教育行政学研究室紀要、第20巻、2001

https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=31902&item_no=1&page_id=28&block_id=31

■主な受講対象

設置認可申請事務に関心をお持ちの事務職員（経験年数は問いません）。設置認可申請業務は様々な業務領域と関連するため、幅広い層の方の御参加を期待しています。

※設置認可申請事務を過去に担当したことのある事務職員の方は、申込みフォーム「備考欄」にその旨を記入してください。

■本プログラムの到達目標

1. 大学設置認可制度の概要を把握し、我が国の質保証システム上での位置付けについて説明することができる。
2. 設置認可制度の事務手続きについて、事務職員としての留意点を説明することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月28日（水）15：30～17：30

場所：愛媛大学城北キャンパス

反転授業をやってみよう ー橋本メソッドの実践からー

■講師

金西 計英（徳島大学 高等教育研究センター 学修支援部門／教授）
徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年、博士（工学）を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授。高等教育のe-Learning活用についての研究に取り組む。また、高等教育におけるICT活用の授業実践の研究にも取り組む。

■プログラム概要

各高等教育機関では、アクティブラーニングの導入が進んでいます。一方、教員個々では、アクティブラーニングの実施に躊躇されている方も多くいます。ここではアクティブラーニングの一種である「橋本メソッド」について紹介します。特に、「橋本メソッド」は反転授業と相性の良いことを説明し、反転授業による「橋本メソッド」について示します。

本プログラムはワークショップ形式で、体験を通し、「橋本メソッド」を学ぶことを目指します。ワークショップ前半は、講義形式で反転授業について説明します。後半は、簡易な形で「橋本メソッド」を体験してもらう予定です。「橋本メソッド」の体験を通し、みなさん独自の方法を開発してもらえればと思います。授業の手法を実際に体験することで、対面授業部分のアレンジが容易になると思います。

なお、「橋本メソッド」とは富山大学の橋本勝先生の開発した大人数向けのアクティブラーニングのことです。

■主な受講対象

アクティブラーニングを自分の授業で実施してみたいけれど、一歩が踏み出せないでいる教員の方を歓迎します。学務系の職員の方も、アクティブラーニングの理解を深めたい、アクティブラーニングを実際に体験してみたいという方は歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 反転授業について授業の構成方法等について説明できる。
2. 橋本メソッドについての授業手法等について説明できる。
3. 反転授業を橋本メソッドと組み合わせて実施する手順を説明できる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

研究支援の基礎知識 ーゼロから始める研究者との協働ー

■講師

宮内 卓也（高知大学 法人企画課法人企画係 係長）

平成 15 年東北大学大学院法学研究科博士前期課程公共法政策専攻修了。平成 15 年高知大学就職総務部総務課法規担当（平成 17 年 3 月まで）として、国立大学法人化後の規則整備を担当（研究系の体制・契約書ひな形等含む）。平成 17 年文部科学省研究振興局学術研究助成課研修生（平成 18 年 3 月まで）科研費担当、研究助成財団・学会等団体の監査担当。高知大学にて平成 18 年知的財産担当（平成 23 年 7 月まで）。平成 23 年科研費等競争的資金担当（平成 24 年 7 月まで）。平成 24 年教育組織改革（学部設置・改組等）担当。平成 27 年法人企画係長（現在に至る）。

■プログラム概要

「研究支援」というと、「科研費」「産学連携・知的財産」のように、「専門的」「複雑」との理由で敬遠されがちな分野です。しかし、大学は教育機関であると同時に「研究機関」であり、教員は「研究者」の側面も併せもっています。また、大学の研究費で「競争的資金」が占める位置は大きくなり、学生の「研究成果」となる学位論文の取り扱いなど、研究系以外の職員も様々な場面で研究に関わることとなります。加えて、近年の科学技術政策を見ると、研究機関が「組織として求められる役割」も拡大・変化してきており、そのなかで職員が果たすべき役割も大きくなってきています。

そこで、本プログラムでは、先ず第 2 期科学技術基本計画（H13）以降、近年の Society5.0 に至る科学技術政策を概観します。その上で、ケースを用いて「競争的資金」などの基礎的な知識・制度に触れながら、「研究機関（大学）における職員の役割」を考えます。

■主な受講対象

研究系（研究協力・産学連携・知的財産など）業務未経験又は経験が少ない職員。

■本プログラムの到達目標

1. 第 2 期科学技術基本計画（H13）以降の科学技術政策の概要を説明できる。
2. 研究機関（大学）における職員の役割について説明できる。

■日時・場所

日時：令和元年 8 月 29 日（木） 9：30～12：00 ※2 時間半プログラム

場所：愛媛大学城北キャンパス

職員のためのプロジェクト・マネジメント

■講師

丸山 智子（愛媛大学 教育・学生支援機構 学生支援センター 講師）

東京学芸大学教育学部教員養成課程卒業。Columbia University Teachers College 修士課程修了。博士(学術)。専門は、教育開発、リーダーシップ開発、プロジェクトマネジメント。愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室にて、教職員の能力開発に従事し、特にSD (staff development) のプログラム開発、及び研修の運営・実施・評価などを中心に担当した。H26年度SDC認定。2018年4月より現職。

砂田 寛雅（愛媛大学 工学部事務課 副課長）

平成13年から愛媛大学教育学生支援部に勤務。主に教務系各組織を歴任し、事務組織の一元化、教務システムの導入、社会共創学部設置、学修ポートフォリオの導入など、数多くのプロジェクト業務を担当。2019年4月より現職。

■プログラム概要

現在の大学職員の仕事は、定常型業務に加え、不確実性の高いプロジェクト型業務としてチームで取り組まなければならない機会が益々増えています。チームは、課や部署内での小さなものから組織的な対応が必要となる大きなものまで存在します。プロジェクトは、携わるメンバーの技量やマネジメント力、人間関係などによって良好になったり低迷したりと、さまざまな要因で変化します。プロジェクトは成り行き任せでなく、継続的にコントロールすることが求められます。

そこで、本セミナーでは、プロジェクトの成功に必要な基本的なプロジェクトマネジメントの知識体系を学ぶとともに、実際に「プロジェクトの立ち上げ」の領域を参加者同士のグループワークによって体験します。

プロジェクトマネジメントは日常業務でも使えるツールであることから、明日からの職場で実際に使えるヒントが得られます！

■主な受講対象

- ・プロジェクトマネジメントに興味のある職員。
- ・プロジェクト型業務を成功させるためのノウハウを獲得したいと思っている職員。

■本プログラムの到達目標

1. プロジェクトとは何かを説明できる。
2. プロジェクトマネジメントのプロセスを述べるができる。
3. プロジェクトマネジメントを職場の業務に活用できるようになる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2901D

経験を学びにかえる ーキャリア形成のためのふり返り入門ー

■講師

塩崎 俊彦（高知大学 大学教育創造センター 教授）

昭和 62 年 3 月、上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻、日本文学。2007 年より高知大学大学教育創造センターで、FD 研修プログラムの作成・実施や授業支援に取り組む。2008 年から SPOD フォーラム等で講師を務める。総合科学系地域協働教育学部門教授。博士（文学）。

末本 美千代（高知大学 学務課 課長）

昭和 55 年高知医科大学事務職員に採用。平成 16 年度高知大学学務課配属、SPOD 設立当初に担当事務として関わる。以降、総務課、法人企画課等を経験し、平成 28 年度高知高専学生課長、平成 29 年度から現職。SPOD 研修プログラム受講の外、外部団体主催「ワールド・カフェ×OST ワークショップ」等への参加経験から SPOD フォーラム 2012 で講師を担当。

■プログラム概要

あなたのこれまでの業務経験で身につけたことは？これから身につけたいと思っていることは？この機会に、あなたのキャリアの棚卸しをしてみませんか？勤務年数の短い方も長い方も、いずれの大学職員の方も歓迎です。

本プログラムでは、これまでの大学職員としての経験のなかで、自身の転機となった出来事や人との出会い、環境の変化などを思い出しながら、その時々にもどのように感じたのか？いまの自分にその経験は活かされているのかなどについて振り返っていただきます。その上で、これからのキャリア形成について考えるきっかけとなることをめざしています。職員歴の浅い方からベテランの方まで、それぞれの経験を語り合うことで、将来にむけた気づきを得られることを目標にします。

■主な受講対象

- ・大学職員としての経験は短い、今後のキャリア形成について考える機会を持ちたいと考えている方
- ・大学職員としての経験はそれなりにあるが、今後のキャリア形成のためのヒントを得たい方

■本プログラムの到達目標

1. 自分のこれまで大学職員としてのキャリアの転機について人に話すことができる。
2. これまでの経験から身につけたこと、これから身につけたいことを人に話すことができる。
3. 他の参加者のキャリアを聞いて、参考になったことを 1 つ説明できる。

■日時・場所

日時：令和元年 8 月 29 日（木）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

トッパーリーダーセミナー 「管理職に求められる政策力」

NEW!

■講師

塩田 邦成（大阪電気通信大学 大学事務局長・理事）

1978（昭和 53）年 3 月立命館大学文学部卒、2014（平成 26）年 3 月東京大学大学院教育学研究科修士課程修了。1978（昭和 53）年 4 月学校法人立命館事務職員。立命館アジア太平洋大学（APU）事務局長・学長室長、立命館大学国際部事務部長、立命館東京キャンパス所長、人事部担当部長、株式会社クレオテック取締役を経て 2017（平成 29）年から現職。

■プログラム概要

2014（平成 26）年、中教審が「大学のガバナンス改革の推進について」を発表しました。ここでは学長のリーダーシップが強調されましたが、同時に学長を支える経営マネジメント人材の必要性、大学行政を支える職員業務の高度化が指摘されていました。これを受けて 2017（平成 29）年、大学設置基準が改正され、教職協働の必要性が盛り込まれました。この過程で明らかになったことは、大学職員が担うべきは「事務仕事」レベルではなく、大学経営や大学行政の特色をふまえたものにシフトさせる必要がある、ということです。講師は、新しい状況下での職員業務のポイントは政策立案業務であり、政策立案能力の育成が重要課題ととらえています。

本講義では、近年の大学職員論を概観し、講師自身が 40 年間大学行政に携わる中で経験したことがらをふまえ、政策立案とは何か、政策力はどのような視点で身につけるのか、事務職員がそのような業務にシフトできる職場条件は何か、を提起します。

質疑応答、一緒に考える時間もしっかり確保して、相互のコミュニケーションを深めたいと思います。

■主な受講対象

現在管理職の方でなくても、高等教育、大学行政を担当する職員としてのマインド形成に関心がある方もぜひご参加ください。

過去・現在の職務経歴、担当業務は特に問いません。

■本プログラムの到達目標

1. 大学職員論の現況と大学職員に求められる業務の新たな水準が理解できる。
2. 政策力とはどのようなものか、そのための自己啓発の方向が理解できる。
3. 業務を見直し、職員としてのコンピタンスはどの部分で発揮されるべきか想定できる。
4. 業務内容に応じて多様な担い手のアサインが想定できる。

■日時・場所

日時：令和元年 8 月 29 日（木）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 2901F

ルーブリック評価入門 ー考える、つくる、活用するー

■講師

俣野 秀典（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップを開発・支援・実施。2010年より担当している本プログラムは毎年最高水準の評価を得ている。関連する著書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（共訳、玉川大学出版部）がある。

■プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められております。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点30点とする”との例が示されており、「ルーブリックって何??」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」づくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

※同日午後が開講される「小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン」において、本プログラムがどのように設計されているかについてもお話しします。協同型アクティブラーニングに興味がある方は受講をご検討ください。

■準備物や事前課題

簡単な事前アンケートを実施する場合があります。

■主な受講対象

- ・ 目標に準拠した評価方法を習得したい教員
- ・ 評価について関心のある教職員
- ・ 協同型アクティブラーニングを体験したい教職員

■本プログラムの到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

学生の学修を促す質問の作り方

■講師

川野 卓二（徳島大学 高等教育研究センター 教育改革推進部門 教授）

1982年、大阪教育大学 大学院教育研究科修了（教育心理学、M.Ed.）。1988年、ユタ大学 大学院教育心理学研究科修了（学校心理学、Ph.D.;統計学、M.Stat.）。1997年より徳島大学 大学開放実践センター勤務。2014年4月より総合教育センター教育改革推進部門へ異動。2019年4月より高等教育研究センターに属し、FD委員長・教育改革推進部門部門長を兼任。2004年より全学FDを担当。

■プログラム概要

双方向の授業を行うが求められています。なぜ私たちは、講義の際に質疑応答の時間を十分に割くことを躊躇するのでしょうか？この研修では、学生のより深い学びを起こさせるために授業で利用できる質問技法について理解を深めましょう。

当日は、日頃、自分の授業で使っている質問を持ち寄り、それらを分類し、それぞれの効果について考えます。また、より深い学びにつながるように本質的な質問に書き直すグループワークの時間をとりたいと考えています。そして、それらの質問をどのように組み合わせることで学生の学びを深めることができるか話し合うことで、参加者の皆さんの優れた質問技法を共有し、後期からの授業準備に役立つヒントを持ち帰っていただきたいと考えています。

■準備物や事前課題

授業で学生によく尋ねる質問（10個）をA4用紙1枚に記載し、必ずご持参ください。

■主な受講対象

授業の際、効果的な質疑応答の時間が持てていないと感じている教員や、より深い学びにつながる本質的な質問をしたいと考えている教員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 授業で使用する質問が持つ機能について説明できる。
2. 自分の授業で用いている質問の型を分類できる。
3. 使っている質問を、学生の学びをより深める本質的な質問に変えることができる。
4. 使用する質問の型を授業の展開に合わせて適宜変えることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）13:00～15:00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2902B

事例で考える教職課程における 多様な履修相談対応



NEW!

■講師

小野 勝士（龍谷大学 世界仏教文化研究センター事務局）

関西学院大学大学院法学研究科民刑事法学専攻博士課程前期課程修了。修士（法学）。平成13年度から龍谷大学に勤務し、教学部、経理課、文学部教務課を経験し、平成28年から現職。大学教務実践研究会代表。関連する著書に『教職課程事務入門【1】』『教職課程事務入門【2】』（ジダイ社）がある。

■プログラム概要

ある日電話で「昭和63年に卒業したのですが、これから教員免許状を取得したいのですが、どのようにすればよいのでしょうか？」とかかかってきたときどのように対応しますか？

このような卒業生等からの相談については体系化された対応マニュアル等がなく、個別対応になる場合がほとんどだと思われます。

本プログラムでは、学生配付の学修の手引きでは対応できない事案について掘り所となる法令を紹介します。そして、学んだ知識の業務への活用方法について、ワークを通じて体験することで教職課程の窓口対応力の向上を目指します。

※大学規模・免許状の種類にかかわらず、すべての大学・短大に共通する内容です。

1. 自己紹介（講師、グループ内のメンバー）
2. 事例（ワーク・講義）
3. 参考書籍・セミナーの紹介（講義）

■主な受講対象

教職課程の履修相談を担当している教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 法令を理解したうえで正確に不足単位の説明をすることができる。
2. 履修相談にあたって必要な情報が掲載されているウェブサイト等を提示することができる。
3. 想像力を働かせて履修相談に対応する姿勢を身につけることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

スタッフ・ポートフォリオ作成ワークショップ

■講師

吉松 明子（愛媛大学 教育学生支援部 教育企画課 副課長）

平成 21 年愛媛大学に採用後、弓削商船高等専門学校へ 3 年間出向、平成 26 年に愛媛大学教育学生支援部教育企画課に復帰、平成 30 年 4 月から現職。平成 27 年度職員のための講師養成講座を受講。平成 30 年 10 月に S P、メンタリングの有用性に関する講義を担当。

西尾 澄気（愛媛大学 社会共創学部事務課総務チーム 特定専門職員）

昭和 53 年 3 月高知大学文理学部経済学科卒、平成 25 年 4 月愛媛大学総務部長、平成 27 年 3 月定年退職、平成 27 年 4 月社会共創学部設置準備室、平成 28 年 4 月より現職。平成 21 年 S P O D フォーラム講師、平成 23、24 年 S P O D 主催学務系研修講師、平成 27 年～30 年愛媛大学教職員能力開発拠点主催スタッフ・ポートフォリオ作成ワークショップメンター担当。

重松 映美（聖カタリナ大学 入試課 係長）

2005 年 4 月聖カタリナ大学に採用。会計課、就職課での業務を経て、2019 年 4 月より現職。2016-2017 年度 S P O D 次世代リーダー養成ゼミナール受講（7 期生）、2018 年 1 月修了。同ゼミナールにおいて、スタッフ・ポートフォリオの作成やメンターを経験。S P O D フォーラム 2018 では、スタッフ・ポートフォリオの効果や活用事例などに関する講義を担当。

■プログラム概要

今、大学を取り巻く環境は大変厳しいものであり、大学職員には、資質・能力の向上や意識改革と併せて、大学運営の重要な役割を担うことが期待されています。

スタッフ・ポートフォリオ（以下、「S P」という。）は、職員の人材育成や職員によるキャリア形成、組織と職員個々のベクトルの確認などに活用されることから注目されています。S Pは、「職員業績記録」とも呼ばれるように、職員としてのキャリアを振り返り、自身の業務内容や業績等をまとめ、可視化したものです。本プログラムでは、S Pの構成や個人、組織としての有用性を紐解きながら、S Pについての理解を深めていきます。

また、S Pを作成するにあたり重要な「メンタリング」の手法を用いて、参加者ご自身の将来像（今後のキャリア）について考えていただき、S Pの一部分を実際に作成するワークを体験していただきます。

S P作成に興味や関心のある方、ご自身の大学にS P導入を検討されている方のご参加をお待ちしています。

■主な受講対象

S P作成に興味・関心のある、もしくはご自身の大学においてS Pを導入したいと考えている職員。

■本プログラムの到達目標

1. スタッフ・ポートフォリオとは何かを説明することができる。
2. スタッフ・ポートフォリオの効果を2つ以上説明することができる。
3. スタッフ・ポートフォリオ作成の体験を通じ、自身の将来像について考えることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2902D

発達障害の診断・傾向のある 学生の対応方法

NEW!

■講師

佐々木 銀河(筑波大学 ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター 准教授)
平成 28 年筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻博士後期課程修了。博士(障害科学)・臨床発達心理士。平成 27 年より筑波大学に在籍する発達障害学生に対する合理的配慮・修学支援の実務を担当するとともに、支援プログラムの研究開発に従事。

■プログラム概要

平成 28 年より障害者差別解消法が施行され、障害学生への不当な差別的取扱いの禁止や合理的配慮の提供が各大学等に義務づけられています。また、大学等では発達障害の診断や傾向のある学生が増加しております。発達障害は「目に見えにくい」障害であるため、教職員の学生指導や対応において身体障害のある学生と比べても難しさがあります。このプログラムでは、発達障害の基本的な定義や概念、発達障害のある大学生における主要な困難を説明します。その上で、実際に発達障害の診断や傾向のある学生との関わり方や授業設計のあり方について紹介します。プログラムの後半では、筑波大学での実際の相談事例を加工して作成した仮想事例動画を紹介し、参加した教職員がそれぞれの立場でどのように発達障害学生に関わったらよいかを検討するグループワークを行います。発達障害は人間の多様な特性の 1 つとして捉えられています。学生の得意な部分を見つけ出し、苦手な部分を補う方法を一緒に考えましょう。

■主な受講対象

- ・学生と直接関わる教職員
- ・学生指導・支援体制等をマネジメントする教職員
- ・カウンセラー・コーディネーター等の専門教職員
- ・多様な学生の教育・支援に関心のある教職員等

■本プログラムの到達目標

1. 発達障害の基本的な定義・概念を説明できる。
2. 発達障害のある大学生が抱えやすい主要な困難を説明できる。
3. 自校の現況に即した発達障害学生支援体制の改善策を提案できる。
4. 発達障害学生への具体的な対応方法を提案できる。

■日時・場所

日時：令和元年 8 月 29 日(木) 13:00~15:00

場所：愛媛大学城北キャンパス

トッパーセミナー
「地域に生き世界に伸びる大阪大学の挑戦」

NEW!

■講師

小川 哲生（大阪大学理事・副学長、理学研究科教授）

1962年1月生まれ。東京大学工学部物理工学科卒業。工学博士（東京大学）。東京大学助手、NTT基礎研究所研究員、大阪市立大学助教授、東北大学助教授を経て、2000年より大阪大学教授。2015年より現職。専門は、多数の原子や電子などが集まっている状態の性質を、量子力学と統計力学に基づいて理論的に解明する物性理論物理学。大学理事・副学長としては財務・情報推進を担当し、国立大学法人の前向きな改革に悪戦苦闘中。

■プログラム概要

「大阪大学の改革について」という表題でお話します。

- (1) 国立大学法人と社会との関係の変化
- (2) 大阪大学の独特の出自と当時の必要性
- (3) 大阪大学の規模と現在の特徴
- (4) 大阪大学ならではの課題と解決策
- (5) 国立大学法人全体の課題、大阪大学の課題、他の個々の大学の課題との共通性と特殊性
- (6) 日本の知識集約社会を国立大学法人がいかに担うか？（公立大学や私立大学との役割分担は？）
- (7) 費用、人材、環境、情報の「好循環」の問題：日本における産学官連携の在り方

■主な受講対象

単なる「大阪大学の紹介」ではなく、全国86の国立大学法人が、日本や世界を良くするためにどのような立場でどのような役割を担っていくべきか、このような関心を持つ方にお聴きいただき、大阪大学の改革例を「反面教師」としてとらえながら、ご自分の大学の改革に活かしていただきたいです。

■本プログラムの到達目標

1. 国立大学法人の置かれている社会的立場が理解できる。
2. 大阪大学特有の長所と短所を理解し、ご自分の大学改革の参考にできる。
3. 今後の国立大学法人の在り方や存在意義について各自の意見を持てるようになる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 2902F

小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン

■講師

俣野 秀典（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップを開発・支援・実施。学内外における研修を多数担当。

■プログラム概要

“学びのプロセスに学生自身がどれだけ関わることができたか”が学習成果を左右すると言われています。ここ数年、学生参加型や双方向型授業といった名称の授業が増えてきていることの大きな理由がここにあります。

そこで本プログラムは、授業の活動性を高めるために、講義の一部にグループ学習やペア学習を取り入れてみたいと考えている／必要性を感じている教員を主な対象として、そのための考え方や方法を参加メンバーと共に学び、理解することを目的として実施されます。

※同日午前が開講される「ルーブリック評価入門」は担当講師のファシリテーションによる協同型アクティブラーニングを実際に体験できる機会となっています。本プログラムと併せて参加することで、より理解が深まることが期待できます。

■準備物や事前課題

簡単な事前アンケートを実施する場合があります。

■主な受講対象

学生の学びを向上させるために、グループ・ペア学習を授業の一部に取り入れたい教員

■本プログラムの到達目標

1. グループでの活動による学習の効果を説明できる。
2. 協同的な学習活動を生産的なものにするための要件について二つ以上説明できる。
3. 学生を参加させるための技法を目的に応じて選択できる。

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

シンポジウム

プログラム番号 2903G

「大学教育の組織力を高める」



NEW!

■講師

濱名 篤（学校法人濱名学院 理事長、関西国際大学 学長、関西国際大学基盤教育機構 教授）
1987年上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程単位取得満期退学、2004年博士（社会学）の学位取得。1998年より関西国際大学教授。主な兼職として、文部科学省学校法人運営調査委員、同大学設置・学校法人審議会（大学設置分科会）特別委員、一般社団法人大学教育学会常務理事、初年次教育学会理事、日本高等教育学会理事など。専門は高等教育論、教育社会学。

畠田 敏行（茨城大学 全学教育機構 准教授）

平成15年4月に金沢大学大学院自然科学研究科地球環境科学専攻博士後期課程を単位取得退学し、茨城大学総務部総務課に文部科学事務官（一般係員）として着任。平成17年3月からは評価室（Office of Institutional Research）の専任教員として評価業務とIR業務に従事する。平成28年8月から全学教育機構総合教育企画部門に異動し、質保証（IE）を中心に、IRおよびアセスメント関連業務を担当している。

井上 真琴（同志社大学 学生支援機構事務部長）

1986年同志社大学文学部卒、大学職員として教務事務、システム開発、図書館、企画業務に従事して現在に至る。その間、大学コンソーシアム京都・副事務局長を務めた。企画業務では、高等教育政策調査およびラーニング・コモンスの設計・運営に携わる。著書として、ちくま新書『図書館に訊け！』（私立大学図書館協会賞）を刊行し、同大学嘱託講師（学術情報利用教育論）を務める。

■指定討論者

弓削 俊洋（愛媛大学 理事・副学長、教育・学生支援機構長）

1978年3月立命館大学大学院文学研究科修士課程修了、文学修士。2000年4月より愛媛大学法文学部教授。その後、国際交流センター長、ミュージアム館長等を歴任。理事・副学長（教育担当；2009年4月～2012年3月、2015年4月～）に就任し、現在に至る。

司会 小林 直人（愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構 教育企画室長）

■プログラム概要

個々の教職員の力が大学教育において重要であることは疑いの余地はありません。一方で、個々の教職員の力の総和が必ずしも大学全体の力ではないことも理解しておかなければなりません。大学教育においては、個々の教員の授業が優れていたとしても、カリキュラム全体として重要な内容が抜け落ちていたり、提供する授業の間に内容の重複が多かったり、学生が段階的に履修できる時間割になっていなかったり、適切な学生支援が受けられない状況であったりしたら、組織として問題があると言えるでしょう。

近年の高等教育政策では、教育の質保証に向けて大学教育の組織力を高めることが期待されています。本シンポジウムでは、大学教育の組織力を高めるにはどのようにしたらよいかを参加者とともに考えます。具体的には、学長はどのようなリーダーシップを発揮すべきなのか、インスティテューショナル・リサーチがどのような支援をすることができるのか、大学職員がどのような役割を果たすことができるのかという3つの観点から、大学教育の組織力を高める方法と課題を議論し、参加者に所属する機関の組織力を高める上での示唆を提供することを目指します。

■主な受講対象

教職員（SPODフォーラム2019に参加される全ての方）

■日時・場所

日時：令和元年8月29日（木）15：30～18：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

グラフィックシラバスを書こう！

■講師

宮田 政徳（徳島大学 教養教育院 非常勤講師）

広島大学大学院 文学研究科修了（英語学）。2001年10月より徳島大学 大学開放実践センター勤務後、2013年4月より徳島大学 教育改革推進センターへ異動。2014年4月より総合教育センターへ異動。徳島大学では、2002年より全学FD企画・運営を担当。SPODでは、2010年よりコア校徳島大学FD担当。2018年に定年退職し、現在は徳島大学教養教育院非常勤講師。

■プログラム概要

グラフィック・シラバスは、通常のシラバス（テキスト・シラバス）では表現できない学習内容をフロー・チャートやダイアグラムや樹形図を使って、一枚のマップで示したものです。学生はグラフィック・シラバスを見ることで、テキスト・シラバスでは分からなかった、毎回の授業目標・内容の流れとそれらの関連性を容易に理解し、授業全体の概念をつかむことが出来ます。一方教員にとっては、グラフィック・シラバスを書くことによって、授業全体の構造を視覚的に概念化し、毎回の授業をよりスムーズな流れで行うことが出来るようになります。

グラフィック・シラバスは喩えていえば、学部や学科の授業のカリキュラムを視覚的に表した「カリキュラム・マップ」のようなものです。このカリキュラム・マップで授業間の関連性がわかるのと同じように、グラフィック・シラバスでは、毎回の授業が授業全体の中でどの位置にあるのかが分かります。

本ワークショップでは、グラフィック・シラバスの概念、その意義や特徴を解説し、作成の仕方を説明した後、参加者皆さんに自身のグラフィック・シラバスを書き上げて頂きます。

■主な受講対象

シラバスを書いて、何らかの授業を担当している教員

■本プログラムの到達目標

1. テキスト・シラバスとグラフィック・シラバスの違いを説明できる。
2. グラフィック・シラバスの特徴を説明できる。
3. グラフィック・シラバスを書き上げることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 3001B

理工系講義形式授業における 発問を中心にすえた授業デザイン

■講師

榊原 暢久（芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教授）

北海道教育大学（札幌校）小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士（理学）。旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師、芝浦工業大学工学部准教授・教授を経て、2019年4月より現職。ファカルティ・ディベロッパー、SDコーディネーター。

日本高等教育開発協会理事、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発（特に、理工系数学基礎教育や教員支援（FD）プログラム）。

吉田 博（徳島大学 高等教育研究センター 教育改革推進部門 講師）

愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FD推進プログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。

日本高等教育開発協会理事、大学教育学会、初年次教育学会等所属。

■プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは、このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で、学生の主体的な学びを促進することに繋がる「発問」を中心に取ります。具体的には、1回の授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し、ワークシートをもとに導入・展開・まとめの構成で授業計画を作成し、特に展開部で「発問」をどのように取り入れていくかを考えます。プログラムの中で、インストラクショナルデザインの理論や、実際の授業事例を紹介し、講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで、自身の授業における課題解決のヒントや、今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。

■準備物や事前課題

参加者が担当する講義科目のシラバス1つ（講義を担当されていない教職員の方は、自校で実施している理工系講義科目のシラバス1つ）を持参のこと。

■主な受講対象

- ・自身の理工系の講義形式授業の中に、「発問」の手法を取り入れたい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業の中で行っている1回の授業設計を他の教員と共有し、改善のヒントを得たい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業を振り返り、基礎的な再構成の方法を知りたい教員

■本プログラムの到達目標

1. 理工系講義形式授業に「発問」を取り入れる方法を修得することができる。
2. 理工系講義形式授業における1回の授業構成をふり返り、成果や課題、改善点を明らかにすることができる。
3. 理工系講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

大学職員の基礎力を考える

■講師

織田 隆司（愛媛大学 教育学生支援部教育企画課 課長）

平成7年高知医科大学事務職員に採用。これまで弓削商船高等専門学校、大学評価・学位授与機構、愛媛大学で勤務。愛媛大学では経営企画課、財務企画課、学長秘書室、教育企画課、医学部総務課を経験し、平成30年度から現職。平成22・23年度に次世代リーダー養成研修を受講・修了。平成28年度SPOD-SDC、平成30年度教職員能力開発拠点SDC認定。

■プログラム概要

近年、めまぐるしく社会環境が変化し、さまざまな立場において求められる能力とその開発を巡って、新聞や雑誌などで取り上げられたり、審議会や学会等で議論が行われています。その中では、所属部署に関わらず必要となる「基礎力」があると言われていますが、社会で求められる基礎力と、大学職員に求められる基礎力に違いはあるのでしょうか。

本プログラムでは、フォーラム全体テーマ「大学教育の組織力」を踏まえつつ、大学職員に求められる基礎力のいくつかに焦点をあて、参加者間で組織を超えた状況・情報を共有するとともに、どういったことが課題となっているか、また、その「基礎力」を職場でどう活かしていくのか、一緒に考えていきます。

意見を出し合い、職場で活かせるヒントを共有しませんか。

皆様のご参加をお待ちしています。

■主な受講対象

係長相当級までの職員。

■本プログラムの到達目標

1. 大学職員に求められている「基礎力」とはどのようなものか、説明することができる。
2. 大学職員に求められている「基礎力」を活用する上での課題を共有し、解決するためのヒントを共有することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 3001D

教職員のための「大学の危機管理」 —事例から考えるハラスメント—

■講師

吉田 一恵（愛媛大学 教育学生支援部 愛媛大学SD統括コーディネーター 兼
能力開発室長）

愛媛大学法文学部法学科卒業。文部事務官として愛媛大学各部局、国際交流センターにおいて主に総務、国際交流を担当。法人化を挟み、広報室長、人事課長、教育学生支援部長を経て平成29年4月から現職。広報室・人事課での約6年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、主に人材育成・評価、労務、男女共同参画、人権侵害事案等々に対応、全事務系職員へのスタッフポートフォリオの導入も実施、教育学生支援部では、入学から就職までの学生支援活動、危機管理事案に対応するとともに、現在まで一貫して教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとして職員的能力開発に取り組んでいる。

高木 佳代子（愛媛大学 総務部就業環境推進室 副室長）

放送大学教養学部卒業。愛媛大学採用後、情報関係、共済関係及び学務関係の業務に携わる。平成28年度4月から就業環境推進室にて、人権侵害事案、裁判対応、相談窓口に係る業務を担当。平成29年4月から現職。SPOD次世代リーダー養成ゼミナール(8期生)平成31年1月修了。学内研修等でのハラスメント防止に関する講師及びSPOD大学人・社会人としての基礎力養成プログラム研修等の講師を担当。

■プログラム概要

あなたが、今、何気なく行っているその言動は、ハラスメントではありませんか？

本プログラムでは、大学等において、今、身近にあるハラスメントについて説明すると共に、ハラスメントが起こった時の初期対応、未然に防ぐための気づきについて考えます。特に、複雑かつ多様化するハラスメントについて、具体的事例を挙げながら、「ケースメソッド」により省察し、①ハラスメント認定のポイント、②ハラスメントが起きた場合の対処方法、③ハラスメント防止のための「施策」を導き出していきます。

■主な受講対象

一人一人が異なる背景をもって、勉学や仕事に臨んでいる現在、組織として、個人として、高等教育機関における

- ・改めてハラスメントに対する基礎知識を得ようと思っている
- ・ハラスメントに対する知識を最新のものにしたいと思っている
- ・攻めのハラスメント防止策を考えたいと思っている
- ・正に、ハラスメントに直面している
- ・現に、ハラスメントを見聞きしている

等々を含め、全ての教職員の方々を対象としています。

■本プログラムの到達目標

1. ハラスメントについて、説明することができる。
2. ハラスメントの事実認定ができる。
3. ハラスメントに対処できる。
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク・講義

プログラム番号 3001E

教務事務関連法規の考え方 ー業務に活かすー



NEW!

■講師

宮林 常崇（公立大学法人首都大学東京 管理部 企画広報課長）

修士（経済学）、民間企業を経て平成 22 年 4 月公立大学法人首都大学東京へ入職、自己点検・評価、中期計画、教務企画、文科省出向、国際副専攻プログラム、全学教務、キャンパス管理、研究推進等に従事し、平成 31 年 4 月から現職。名古屋大学高等教育研究センター教務系SD研究会・大学教務実践研究会事務局長、同センターマネジメント人材育成研究会、公立大学職員SDフォーラム代表等を務める。

■プログラム概要

教務事務では学内規程等が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、教務事務関連法規の考え方が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。

この研修では、法規の基本を確認した後、教務事務の現場で起こるケースを題材としたミニワーク（退学や休学・単位認定・編入学・授業時間と回数の関係 等）や、組織における実践的な知識の継承の必要性和工夫を理解することで、大学教育を支援する職員に求められる基本的な知識や心構えを身につけます。教務事務に興味関心があれば、教務事務の経験が全くない職員の方の参加も歓迎します。

※ プログラムの7割程度は、大学教務実践研究会が毎年開催している「教務系職員初任者講習会」と同一です。

■主な受講対象

- ・教務事務を担当して1～3年目程度の職員
- ・教務事務の経験はあるが、根拠を意識して業務を遂行したことがあまりない職員
- ・教務事務の経験はないが、教務事務関連法規の考え方に触れてみたい職員（会計や施設管理といった「管理部門」の方にも、高等教育機関で働く上で大切な視点を身につけることができます）

■本プログラムの到達目標

1. 大学教育を支援する職員に求められる基本的な知識や心構えを身につけることができる
2. 担当業務の根拠を自分で調べることができる。
3. 教務事務を取り巻く制度（単位認定や退学・除籍など）の根拠と実務の差を説明できる。
4. 教務事務として適切な対応ができる。
5. 実践的な知識を継承することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）10：00～12：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

カリキュラムコーディネーターのための基礎知識

NEW!

■講師

中井 俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 教授）

専門は大学教育論、人材育成論。1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手、2007年に准教授、2015年より現職。大学教育学会理事および日本高等教育開発協会副会長。著書に、『大学のFD Q&A』（共編著）、『アクティブラーニング』（編著）、『看護教育実践シリーズ2 授業設計と教育評価』（共編著）、『看護教育実践シリーズ3 授業方法の基礎』（共編著）、『大学のIR Q&A』（共編著）、『大学の教務 Q&A』（共編著）、『大学教員準備講座』（共著）、『成長するティップス先生』（共著）などがある。

佐藤 浩章（大阪大学 全学教育推進機構 准教授）

専門は高等教育開発、技術・職業教育論。2002年に愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部講師となり、同大教育・学生支援機構教育企画室准教授、副室長などを経て、2013年10月より現職。大学教育学会理事および日本高等教育開発協会会長。著書に『講義法』（編著）、『大学のFD Q&A』（編著）、『大学の質保証とは何か』（共著）、『大学教員のための授業方法とデザイン』（編著）、『学生と楽しむ大学教育：大学の学びを本物にするFDを求めて』（共著）、翻訳に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（監訳）などがある。

■プログラム概要

大学の活動は基本的に協働的な営みです。「〇〇先生に私は育ててもらいました」と述べる学生もいますが、大学の中において一人の大学教員が学生を育てているという見方は正しくありません。大学の教職員は協力して学生を育てているのです。大学の教職員が協力して学生を育てるには、カリキュラムとその運営が重要になります。

これまで大学のカリキュラムの運営は難しいと言われてきました。しかし、カリキュラムコーディネーターの配置が政策として推進されるようになり、大学でのカリキュラムの議論が進めやすくなりました。

このプログラムでは、各大学でカリキュラムをどのように運営することができるかについて論点とさまざまな実践事例を紹介することで、参加者の所属大学に適したカリキュラムの運営の方法を明確にしていきます。参加者のみなさまには、ディスカッションやグループワークなどの活動に積極的にそして建設的に参加することを期待しています。

■準備物や事前課題

自大学のカリキュラムがわかる資料を持参する

（学生便覧や高校生向けパンフレット、3つのポリシーやカリキュラム評価の報告書など）

■主な受講対象

カリキュラムの開発や評価に関わる教職員

■本プログラムの到達目標

1. 大学のカリキュラムの特徴と編成の基本原則を説明することができる。
2. 所属組織のカリキュラムの特徴と課題を抽出することができる。
3. カリキュラムに関する基本的な課題解決の方法を提案することができる。
4. 他機関の教職員と友好的で建設的な関係を構築することができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）10：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

学びやすさを高めるための授業の再構造化

■講師

仲道 雅輝（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

1995年日本福祉大学社会福祉学部卒、2009年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了（修士：教授システム学）。2017年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士後期課程修了（博士：学術）。1995年より日本福祉大学職員。2011年から愛媛大学にてFD・SDや学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。（H20年度eLC認定e-Learning Professional、H26年度SDC認定）

主な著書には、ナカニシヤ出版の「大学におけるeラーニング活用実践集—大学における学習支援への挑戦2」（共著）、「大学初年次における日本語教育の実践—大学における学習支援への挑戦3」（編著）、さくら社出版の「教育評価との付き合い方—これからの教師のために」（共著）など

■プログラム概要

学生の学びやすさと学習意欲を高めるために、ID（インストラクショナル・デザイン）理論を用いて授業設計の手法を学びます。学習意欲は、学びやすさによって維持・促進され、動機づけによって高めることができます。学びやすさや意欲を設計するためには、教員が自身の教授内容を明確にし、学生目線で再構築する作業が必要です。その第一段階として、学生に対して「この授業で何ができるようになればよいのか」が具体的に伝わる学習目標を提示します。次に、教員の頭にある既に構成された教授内容を一旦分解します。これを課題分析といい、分解した学習要素をより学びやすく、意欲の向上に効果的な学習順序になるよう再構築します。

本プログラムでは、課題分析のワークを通して、これからの授業改善に役立つヒントを持ち帰っていただきます。

■主な受講対象

授業構成の見直しに関心のある教員

■本プログラムの到達目標

1. 学習目標を行動目標として明確に表現できる。
2. 課題分析の考え方を説明できる。
3. 自身の教授内容の課題分析図が作成できる。
4. 課題分析図の結果をもとに、授業構成の改善点を説明できる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

支え促す体験学習

■講師

高橋 平徳（愛媛大学 教育・学習支援機構 講師）

専門は生涯学習論、組織論（人的資源管理）、教員養成。2002年早稲田大学教育学部卒業、2011年早稲田大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。2016年北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。修士（教育学）、博士（経営学）。2011年千葉大学大学院看護学研究科特任助教、2014年札幌医科大学医療人育成センター特任助教を経て2015年より現職。著書に「救急救命士の経験学習プロセス：医療専門職間の連携に注目して」松尾睦編著『医療プロフェッショナルの経験学習』（同文館出版、2018）がある。

■プログラム概要

私たちは日々何かを体験し、それをもとに考え、自分自身を作っています。皆様も1人の人間として体験を重ね、今のあなたをつくられているでしょう。また、教職員として、学生やスタッフにも豊かな体験を与え成長してほしいと考えておられるでしょう。

体験学習とは具体的にどのようなもので、どのように実践していけばよいものでしょうか。その重要性を実感していながらも、いざ説明や実践となると、とまどわれるのではないのでしょうか。

本プログラムは、「支え促す体験学習」として、より効果的に体験学習を行えるよう、体験学習の基本的な考え方や、具体的な支援の視点や方法をおさえることができる機会となるよう構成しています。体験学習の概念や過程、成長を促しやすい体験、体験学習を支援し促す方法などを、レクチャーとグループワークによって理解します。

■主な受講対象

体験学習の理論や実践に関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 体験学習の概念を説明できる。
2. 体験学習の過程を説明できる。
3. 成長を促しやすい体験を説明できる。
4. 体験学習を支援し促す視点と方法を説明できる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

ワーク中心

プログラム番号 3002C

5年後のなりたい自分像のために －何から始めますか？－

■講師

各務 正（梅光学院大学 副学長）

1972年東京都立大学経済学部卒業、2011年順天堂大学大学院医学研究科博士課程修了、博士（医学）の学位取得。1972年から定年まで順天堂大学在職。大学院並びに医学部、看護学部の教学部門、新学部開設準備室、国際交流センター、学校法人の経営企画などを歴任。1998年から大学行政管理学会を中心とした学会活動に参加。1999年から同学会「大学職員」研究グループ・リーダーとして全国の大学で教職員との直接対話による実践重視のSD研究・研修を推進。2011年から4年間SPOD事業評価委員。2016年から現職。

野口 里美（香川大学 経営管理室企画グループリーダー）

1986年香川大学採用。総務、会計、学務を一通り経験した後、今年度から現在の部署に所属。2007年度から2012年度までFD関係業務を担当し、SPOD設立当初からネットワークコア校のFD担当事務として携わる。これまでのSPODフォーラムでは、「ワールド・カフェ」「ツールを使ってコミュニケーション～自己理解と他者理解～」の講師を担当。2015年度SPOD-SDC認定。2016年度教職員能力開発拠点SDC認定。その他、Coco-iku（心育）インストラクター（SPTコミュニケーションカウンセラー）、キャリアアトランプファシリテーター認定。

■プログラム概要

みなさんは5年後どのような大学職員になっているでしょうか。

現在、職員の能力開発のために初任者研修から始まり職位にそった研修や特定のスキルを身に付ける研修など、様々なプログラムが用意されています。これらの受講にあたっては、しっかりと自分なりの目標を定めて参加するよう指導もあったと思います。ただ私たちの経験では職員は日常業務に精一杯で、自分自身の研鑽目標をじっくりと考える時間がなかったように感じます。

このプログラムでは、5年後の自分像、いまの自分、5年前の自分、を仲間とともに観察しディスカッションすることによって自分自身の目標を見える化することを目的としています。これができれば受講したい研修等は自ずから見えてきます。自分で気が付いていなかったことを教えてくれる仲間は自分にとって、また自分は仲間にとってのファシリテーターです。そうしたインタラクティブな時間を楽しみながら、自分自身の5年後の像に近づくロードマップを確実にしましょう。

■準備物や事前課題

5年後のなりたい自分像を考えてきてください。

■主な受講対象

採用5年～10年の職員を対象とします。

■本プログラムの到達目標

1. 自分の考えを他者に伝えることができる。
2. 他者の考えや思いを自分の言葉に置き換えて考えることができる。
3. 自分自身に必要な行動（アクション）を客観化することができる。
4. テーマ（話題）にそってディスカッションすることができる。

■日時・場所

日時：令和元年8月30日（金）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

教職員のための 「初めての合理的配慮」講座

■講師

太田 琢磨（愛媛大学 教育学生支援部 学生生活支援課 バリアフリー推進室）
平成 18 年 3 月東海大学にて修士（保健福祉学）の学位取得、平成 18 年 4 月から平成 19 年 8 月まで、Rochester Institute of Technology/ National Technical Institute for the Deaf、Master of Science program in Secondary Education/大学院 特別研究生として、アメリカにおける障害学生支援現場の研究・調査を行う。平成 21 年より、愛媛大学バリアフリー推進室の職員として、障害学生支援の現場を担当。

■プログラム概要

国連の「障害者の権利に関する条約」の締結に向けた国内法制度の整備の一環として、障害を理由とする差別の解消を推進することを目的として、平成 25 年 6 月、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が制定され、平成 28 年 4 月 1 日から施行されました。この法律では、公的機関に合理的配慮提供の法的義務、民間機関に努力義務が課せられました。法律の施行から 3 年が過ぎ、障害のある学生の受験者数も増加しています。今後入学してくる学生に対して、合理的配慮を円滑に提供していく必要性があります。

この研修では、合理的配慮の提供のために教職員が知っておかなくてはならないこと、対応の際の注意事項について学びます。また、当日は障害のある学生から大学生活の中で直面する困難性について話していただく予定です。

専門知識がなくてもできることはたくさんあります。本講座を通して、障害のある学生が安心して過ごせる環境作りについて学びましょう。

■主な受講対象

- ・ 障害学生の支援の基礎を学びたい教職員
- ・ 合理的配慮の基本的な提供方法について学びたい教職員
- ・ 日常的な業務の中で障害者と関わることのある教職員
- ・ 障害学生支援の部署で働く教職員

■本プログラムの到達目標

1. 障害者差別解消法について基本的な考え方を理解することができる。
2. 社会モデルの考え方について理解できる。
3. 合理的配慮の提供プロセスを理解することができる。
4. 高等教育機関における合理的配慮の提供範囲について理解することができる。
5. 合理的配慮提供のために、最初にやるべきことについて理解することができる。

■日時・場所

日時：令和元年 8 月 30 日（金） 13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス

講義中心

プログラム番号 3002E

伝わるテクニックとしてのデザイン ーレイアウト編ー

NEW!

■講師

徳田 明仁（愛媛大学 広報室 副室長、ミュージアム 准教授、
大阪大学 総合学術博物館 招聘准教授）

平成 10 年 3 月多摩美術大学美術学部デザイン科卒、民間企業デザイナーを経てデザイン事務所を設立。平成 20 年 11 月より愛媛大学ミュージアム准教授、平成 27 年度より大阪大学総合学術博物館招聘准教授を兼務。平成 30 年度より愛媛大学広報室副室長を兼任。大学広報副学長のもと、大学全体の広報・ブランディングから情報発信拠点であるミュージアムの展示・運営まで幅広く担当。

■プログラム概要

誰かに何かを伝えるには、きちんと整理して見せる必要があります。それが正しく伝わる最善の方法だからです。デザインとは情報を整理して、正確に、わかりやすく視覚化することです。メッセージを載せて相手に届け、目的の行動をしてもらうように背中を押すことがデザインの役割です。そして、情報をより効果的に伝えるためには、情報の受け手をよく理解することが欠かせません。性別や世代、地域や嗜好など、どのようなターゲット層に向けて情報を発信するかによって、表現方法を変える必要があります。デザインの役割を理解し、受け手に合わせた最適な表現をすれば、伝わる資料・わかりやすい紙面に近づいていきます。

この研修では、講義形式にて、レイアウトという作業に主軸をおき、文字や文章、色や図表など主要な構成要素に関するデザインルールやそれらの組み合わせのためのレイアウトルールを紹介します。それぞれの素材の役割を意識しつつ、メッセージを伝える最善なテクニックを選び、的確に使うことができるよう習得頂けたらと思います。

■主な受講対象

デザインテクニックに関心のある教職員。

■本プログラムの到達目標

1. デザインルールを具体的に説明できる。
2. 自信を持ってレイアウトデザインをつくることができる。
3. メッセージを伝えるテクニックを選び、使うことができる。

■日時・場所

日時：令和元年 8 月 30 日（金）13：00～15：00

場所：愛媛大学城北キャンパス